
大魔王のひみつ（大魔王が倒せない番外編）

はぐれっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大魔王のひみつ（大魔王が倒せない番外編）

【Zコード】

Z2380Y

【作者名】

はぐれっち

【あらすじ】

大魔王が倒せないの外伝短編集です。バトルとかあまりない、日常系メインになります。大魔王が倒せないのネタバレが含まれますし、読んでいないと意味がわかりませんのでご注意ください。

Web拍手で書いているおまけ小話の古いものを移してきたものです。Web拍手ですでお読みになられた方は読む必要はありませんがいかとも思いますのでご注意を。

本編もそんなに面白いわけでもないかも知れませんが、こちらはさらにくだらない内容になっています。

R 15、残酷な描写ありは今のところ該当しないと思いますが、本編が該当するためこちらにも念のためつけています。

魔王ファンクラブ（前書き）

1章完了後ぐらいの話ですので、本編1章まで読了後にお読みください。
あと、少々下品かと思います。無理だと思つたらバックしてください。

大魔王ファンクラブ

大魔王ファンクラブ。

いつの間にかそんなものが首都ベイヤーで結成されていた。

大魔王のファンがより集まり自然とその規模を大きくしていったもので、今では300人を超える会員が集まっている。

人が集まればそこには序列が出来、会長を頂点にピラミッド型の位階が形成された。

彼らの活動の主なものは大魔王をつけ回すことだ。

つかず離れず大魔王の活動を監視し喜びに浸る。その一挙一動にほれぼれとし、ため息を付く。

他には大魔王の写真を撮り、会報を作り、会合を開いた。

そんな大魔王ファンクラブでは今、ある論争が持ち上がっていた。それは大魔王は排泄行為を行うのか？ という余人にとつてはどうでもいい、だが会員たちにとつてはとても真剣な話題だった。

まず、大きく分けると「しないよ派」と「するよ派」に分かれた。

「するよ派」は大魔王といえども普通の少女だ。するに決まっているだろうと、血走った目で訴える。というかしてくださいという感じだった。傍から見ていると、ただの特殊な性癖の持ち主にしか見えなかつた。だが、それに賛同するものもかなりいた。

対して「しないよ派」は想像力にあふれるロマン派ともいえるが、ちょっと無理があった。「するよ派」からすると、お前らファンタジーの世界にでも生きてるつもりかよ、となる。実際議論が白熱するところに近いことも言つていた。

ただ一見議論するに値しないと思われる「しないよ派」を後押しする理由がある。それは、大魔王を日夜つけ回し続ける彼らが大魔王がトイレに行く姿を見たことがないということだ。それが彼ら「しないよ派」の根底にある。

まず勢力としてはそれほどでもないが根強い派閥として「肛門が

そもそもない派」がいる。なければ排泄などしようがないということだ。この時点で大魔王は人間と同様の生物ではなく消化器官の存在も怪しくなつてしまつがそこまでは考えていないのだろう。

対するは「肛門はあるが何も出ない派」だ。大魔王は精力的に食事を行なつてゐる。故に消化器官はあるのだろうが、最終的には何も出ないというのがこの派閥の主張だがそれも苦しい。

それをどうにかしようとしたのが「肛門からは排泄物以外の何かが出る派」だ。だが、それも結局は何が出るのかを説明出来なかつた。

そんな一般人から見ればどうでもいい議論が日夜繰り返された。そしてその果てしない議論の末に一人の勇者が立ち上がつた。

副会長のティートヘルムだ。彼は「するよ派」の急先鋒として知られ、大魔王の排泄物なら同量の金塊と交換してもいいと言い放つ剛毅な男だつた。彼はこの業績により、第4の勇者とも尊われるようになる。

アレがヤバイ亭の窓際の4人がけの丸テーブル。いつもの席に大魔王は腰掛けていた。

向かい側にはまだ幼い少女が床に届かない足をぶらぶらとさせながら夢中になつてプリンを食べている。

大魔王も同じようにゆっくりとスプーンを口に運んでいた。

「ライサさん、プリンはおいしいですか？」

「うん！ ありがとうお姉ちゃん！」

少女は元気いっぽいに答えた。

「遠慮無くいっぴい食べてくださいね」

「お前は少しは遠慮しろよー」

追加でプリンを持ってきた給仕の少年『デリクが苦々しげに言つた。

「うちは酒場だぞ。なにプリンとか作らせてんだよ」

「オカミさんが作れるつて言いましたよ?」

「普段こんなもん作つてないんだ。手間に決まつてんだが!」

「こんな小さな子に怒鳴りぢらすなんてひどいですね」

そう言われてデリクはライサと呼ばれていた少女を見た。夢中でプリンを食べていた手を止め、涙目で見上げる少女と目が合つ。

「ああ、いやお前に言つてるんじゃなくつてだな……どなつて悪かつたよ。泣くなよ、な」

デリクは慌ててライサをなだめた。そんな二人を横目に大魔王は悠然とプリンを食べている。

昼時を過ぎたせいか客はまばらだ。いつもなら、遊んでないで働きな! と女将から声がかかる所だが比較的余裕があるせいか静かなものだった。

そんな穏やかないつもの昼下がりにその男は現われた。酒場の扉を押し開き入つてくると店内を見渡す。大魔王を見つけるとまつすぐにやつてきて、ひざまずき頭を垂れた。

若い男だ。派手ではないが質の良い服装を上品に着こなしている。そのたたずまいから貴族と思われた。

デリクはその男を見て少し不機嫌になる。美男子だ。大魔王にちよつかいをかけに来たのかと思つと心がざわつぐ。

「大魔王様、お伺いしたいことがあるのですがよろしいでしょうか？」

「いいですよ。私はこの国の礼などには疎いでするので細かいことは気にせずに楽にしてください」

そう言われると男は頭を上げ大魔王を見上げた。

「私は『ディートヘルム』と申します。3等貴族で、近衛兵を務めさせていただいています」

「そうですか。『苦労様』です。それで聞きたいこととはなんでしょう？」

大魔王はこの男の顔を見てわずかばかり記憶を刺激された。レガリア奪取時に適当に雷撃で倒した有象無象の中にいたような気もある。

『ディートヘルム』は言いよどんだ。すぐに言葉が出てこない。何度も迷ったあげくようやく搾り出すように言った。

「大魔王様は……排泄行為を……その、なされるのでしょうか？」

店内の視線がこの一角に集中した。実はこの店にいるものの大半は大魔王ファンクラブの会員達だった。ディートヘルムが論争に決着を付けるべく立ち上ると聞いて集まってきたのだ。

「おしつことかうんちのことですか？ しませんよ？」

店内が一斉にざわめいた。嘆くものもあれば、歓喜にむせぶものもいる。その様子は様々だ。

「アルティメット・シヤンク
『究極生命体』となつてからは、食事は完全にエネルギーとして消費

されるようになりましたので排泄は必要なくなつたのです

ディートヘルムの顔が驚愕に歪む。ひざまづいた姿勢ながら身体がぐらぐらと揺れそうになる。床が不安定になつたように感じた。だが、それを抑えこむと毅然と顔を上げ言つた。

「そ、それは……いえ！ だからと言つて大魔王様への忠誠に変わりはありません！」

「ええー、おしつこしないの、お姉ちゃん！ いいなあ、私昨日もおねしょしてお母さんに怒られたのに……」

ライサがしょんぼりとする。余程怒られたのだろう。思い出しただけでも泣きそうだった。

「大丈夫ですよ。ライサさんも頑張れば**究極生命体**となつて、排泄は必要なくなります」

「ほんとー！」

「ええ、きつとなれます」

頑張つたぐらいで**究極生命体**とかになれるのかよ……。つか、なんで瞬間の酒場でうんこの話してんだよ。

「いろいろ言いたい」とはあつたが、デリクは呆れて声も出なかつた。

「で、では肛門はあるのですか！」

店内がさらなる驚愕に包まれた。まさかそこまで聞くのか！ 勇者だ！ 新たな勇者の誕生だ！ ザわめきが止まらなくなつた。

「ありますよ。究極生命体と言つてもベースは人間ですので、身体構造は人間と同様です」
アルティメット・シング

「ディートヘルムの顔が喜びに包まれる。だつたらいける！ 妄想で！ つぶやくような声だつたがその場にいた数人には確實に聞こえてた。

「デリクはディートヘルムの性癖に正直引いていた。いくら美男子でもそれはない。

「なんでこいつそんなことで喜んでんだよ！ つーか大魔王も何答えてんだよ！」

いつの間にかディートヘルムの周りを会員たちが取り囲んでいた。そして肩をたたき讃えた。それぞれ思想や立場は違うのだろうが全員がいい顔をしていた。仕事をやりきった男を褒め称える改心の笑顔だ。

「究極のアイドルだ！」

誰かが叫んだ。

「うおお！ 感極まつた声があたりをばばからず響く。

「女将！ 酒だ！ ありつたけもつてこいー！」

いつの間にかライサと大魔王はいなくなつていたが、酒宴はその日の夜遅くまで続いた。

いつまでも騒ぎ続ける男女の間を忙しく行き来しながらデリクは思つた。

「こいつら頭おかしいよ……。

魔王ファンクラブ（後書き）

モー娘。でこんな話あつたよなあ、といつところから作ったネタで
すw

リーリアに忠告を（前書き）

2章完了後の話しだすので、2章読了後にお読みください。

リーリアに忠告を

「集まつてもらつたのは他でもない」

そう切り出したのはディートヘルム、王の周辺を守護する近衛兵の男だ。

テーブルの前に立ちあたりを見渡している。アル、リーリア、イールはなんだかよくわからないといった顔で席に着いていた。ここはアレがヤバイ亭の一室だつた。内密な話をするためにか2階の個室が用意されていた。

「えーと、すいません、これは一体なんなんですか？」

アルが疑問を呈する。もつともな話だつた。

アルたちはキャシー宅で今後の計画を練つていたのだが、そこに酒場から使い走りの少年デリクがやつてきた。近衛兵の方が呼んでいるので酒場に来て欲しいと言つ。断るのも角が立つかと思いつしてやつてきたが話が見えない。

「あなた誰なんですか？」

冷たい目でイルがディートヘルムを睨みつける。

「ああ、自己紹介がまだだつたか。私はディートヘルム。近衛兵だ。まあ最近ではそれよりも、大魔王ファンクラブの副会長としてのほうが有名だらうか」

ディートヘルムは誇らしげに言つた。近衛兵というよりも、大魔王ファンクラブの方に重きを置いているようだつた。

「え、パエリアさん、ファンクラブとかあるの？ やつぱり綺麗な人は違うよね、アル君」

リーリアがファンクラブに反応した。すこし羨ましそうにも見える。

「うん？ パエリアとはなんだね？」

「え、大魔王さんのお名前ですけど……」

「なんだと！」

ディートヘルムが目をむき出し怒鳴った。リーリアは怯えアルにしがみつく。

「ディートヘルムさん、興奮しないでください」

アルがとりなす。これはちょっと怖い。

「それはどこで知った！」

「えーと、キヤシーさんの家で、ですけど……」

「ああ、あの時か？」

「え？」

「私は非番の時は大魔王様を見守り続けている。それを副会長の権限を濫用しているととられても困るがな。ちゃんと順番は守っているぞ」

リーリアのアルを掴む力が強まる。何を言っているのか意味が分からない。

「ディートヘルムさんは大魔王をつけ回しているんですね？ そし

てそれはファンクラブのメンバーの間で順番に行われている。で、あなたが非番の時に自分の番が回ってくるように調整している。その活動中に大魔王がキャシーさんの家に行くのを見た……ということですか？」

アルがまとめてみた。まとめられるとよりいつそ恐怖くなったり一リアはますますアルにしがみつく。

胸押し付けすぎだと思つけど、気付いていないのかな……。

特に指摘はしなかつた。

「そうだ。さすがに人の家にまで侵入することはないから、そこで何が行われているかまではわからなかつたが……そうか……パエリア様か……可憐だ……」

いや、それは食い物の名前だろ？

とても言えなかつた。恍惚とした表情で悦に入るこの男にそんなことを言えばどうなるかわからない。

「で、僕たちはなんのために呼ばれたんですか？ 大魔王の情報収集ということですか？」

「いや。違うのだが大魔王様の話を聞けるというならありがたい。他には何か聞いていいのか？」

アルは言つていいのか迷つた。敵ではなさそうだし、大魔王のどんな情報をもらしたとしても大魔王が気にすることはないだろう。だが、こんなあきらかにおかしな様子の男に教えていいものか？ その逡巡をとらえるとティートヘルムは懐から長財布を取り出し

た。札を10枚引き抜くとテーブルにおく。

「10万リルだ」

「魔王の着ているドレスは闇の衣といひうじいですよ
「ちょっと、アル君！」

リーリアがアルを睨みつける。怒りなれでいないせいか拗ねているぐらいにしか見えない。

「別に黙つてろと言われてないし、いいんじゃないか？ 10万リルは魅力だろ？」「他には何があるかね？」

札がさらば10枚、ディートヘルムの手に現われた。

「その闇の衣は光の玉ではぎとぬことが出来るらしいです
「な、何だと！ はぎとぬとせじうこうことだ！」「さあ、服がなくなつて裸になつたやうんじゃないですか？」

ディートヘルムがくらうとゆれた。そのまま倒れてしまつよつと見えたがなんとか持ち直したようだ。

「や、その光の玉とこののはどにあるのだー！」

「さあ、そこまでは……」

「それはなんとしても手に入れねばなるまい！ いや私が使おうとこうのではないぞ！ 大魔王様の裸身をさらすようなことがあつてはならないからな！ 私がこの手に確保して誰にも使われないようにするしかあるまい！」

札が20枚になった。大金だ。

アルはうながされるままにあらたな情報を口にした。

「下着は闇の下着といふらしいです」

「アル君！ それはダメ！」

リーリアがアルの腕をぎゅっとつねる。結構痛かった。

「ほう……それはさうに詳しく聞きたいところだな」

せりに10枚。30万リルがばわばと振られる。

「色は黒です。レースっぽかたですね」

デイートヘルムの動きがぴたりと止まる。

アルは現金を前に調子にのりました。

「見たのか？」

「ええ」

「キええ！」

怪鳥音と叫うのか。鋭い呼氣と共にデイートヘルムの左腕が振るわれた。手にはナイフ。それがアルの手を手掛けて一直線に飛んできた。

アルは咄嗟に腕をあげそのナイフを掴みとった。ギリギリだ。瞳の数センチ先で刃先がぶるぶると震えている。

タイミングを同じくして、イルがテーブルの上に身をのりだしていた。

「にじさん……油断しすぎです」

その手にもナイフが握られている。ナイフは一呼吸で2本立て続けに投げつけられていた。イルがいなければ2本目が突き刺さつていたことだろう。

「あんた、何するんだ！」

アルが思わず立ち上がり怒鳴る。いきなりすぎた。今の会話でなぜこうなるのかさっぱりわからない。

「ああ、すまん、私の中で嫉妬が爆発した。悪く思わないでくれ。つい、大魔王様の秘密の花園を写したような、眼球など潰れてしまえばいいと思つてしまつたのだ」

「それは思うだけにしてくれ！ 実行に移すな！」

なんでもないよう言いつテイートヘルムにアルは戦慄した。

「こいつ……かなり強い。

「まあそういうきりたつな。私の悪い癖だ」

「その癖で何人も死んでそうだな！」

アルは気を取りなおして着席する。もう丁寧に話すのも馬鹿らしくなつてきていた。

「で、大魔王の話じゃなかつたらなんで僕たちを呼んだんだ？」

「ああつい脱線してしまつたが本題はそれではない。リーリア君、君だ」

その場の視線がリーリアに集まつた。

「え？ 私ですか？」

リーリアが自分を指さして戸惑っている。

「うむ、じにじぱらくリーリア君を見ていたのだが、君は非常に危うい！ これから旅に出るそうだが……心配になつてな。老婆心ながら一言忠告をと思つたのだ！」

「ちょっと待つてくれ！ あんた大魔王ファンクラブなんだらう？ なぜリーリアをつけまわしている！」

「大魔王様は至高の存在だが、だからと言つて他の花に目を向けてはいけないわけではないだろ？ 」

「怖い……」

リーリアがぼそりとつぶやいた。つけまわされていたなんてまったく気づかなかつた。

「それにだ、栄誉ある大魔王様番のローテーションは厳格に決められている。それ以外の時間はどう使おつといいだろ？ 」

「どんな理屈だ！」

ディートヘルムに何を言つても無駄なのか話は勝手に進められる。

「50人」

「は？」

「リーリア君に手をだそつとした男どもの数だ」

「どういうことだ？」

「こう言つとあれだが、リーリア君は非常に男好きのするタイプだ。街を出歩けばかならずちょつかいをだそつとしてくるものがいる！」

「え？ でもそんな人見かけませんでしたよ？」

リーリアが不思議そうな顔で言ひ。

「ああ心配しなくていい、全て排除しておいた。女性は愛でるものだ。暴力に訴えむりやり事に及ぼうなど言語道断！」

「排除つて……いつからだ？」

「大魔王さまとリーリア君がお会いしたあたりからだな。キャシーとやらのうちの周囲で見かけてから大魔王ファンクラブとして注目していた」

「それは……おかしくないか？ リーリアは一度さらわれたことがあるぞ？ その時は見ていなかつたのか？」

「ああ……あれば痛恨のミスだつた！ 私は北門の守衛所の前にいたのだが……そこで尿意を我慢する少女を見かけてしまったのだ！」

「はあ？」

「そうなれば……追わずにいられまい！ 我慢しきれなくなつた少女が物陰でいたすのではないかと思うと……」

「ちょっと待て！ 意味がわからん！」

「私が至福の一時を堪能して戻つてくるとリーリア君の姿はすでになかつた」

「あほか！」

「にいさん、こいつ殺していいですか？」

即座に許可を出したい所だつたが自重した。一応こんなのでも貴族、近衛兵だ。

「反省した私はそれからは必ず一人以上をリーリア君につけることにした！」

「アル君……私もつ帰りたい……」

リーリアが情けない顔でアルを見る。アルも同じ気分だ。

「大魔王ファンクラブは精鋭だ！ これで滅多なことはおきん！」

「いや……その大魔王ファンクラブが一番怖い」

「と、思っていたのだが、一般会員では対処できないものがあらわれたのだ！ 第三遊撃隊の勇者、ヴァルターだ！」

「え……いやちょっと待て！ それはないだろ？ なぜあいつが生きている？」

予想外の名前が出てきた。死んだところは見てはいなかつたが、状況からして死んだと思っていた。

「うん？ なぜ死んだと思ったのだ？」

まさか自分が殺したつもりでしたとは言えない。やぶ蛇だつた。

「いや……そう！ 第三魔族領は全焼してその場にいたものは全て焼死したと聞いたと思う」

「ああそのことか。それは第一遊撃隊のゴドウインがどうにかしたらしいな。聖盾の力で、炎が収まるまで開拓団と共に地下へと潜つていたらしい」

第一遊撃隊のゴドウイン。アルは直接見たわけではなかつたが、確かに開拓団と物資を野族から隠すために別行動を取つていたはずだ。ならば、野族の襲撃もそいつがさばいたということかとアルは推測した。

「まあ、ヴァルターは私が倒しておいたから大丈夫だが
「倒したのかよ！」

「ああ。まあ殺してはいない。さすがに勇者を殺してしまつと問題だからな。だがきつちり言い含めておいた。今後リーリア君に手をだすことは一度もないと思つ。思うが……あの男のことだ。もしやと

「うー」とはあるかもしれん。注意はしておいてくれ

まじまじとディートヘルムを見る。先ほどの投げナイフだけでもその力量はうかがえた。しかし勇者に勝てるほどとは。

「あんた……勇者なのか？」

アルも勝ちはしたがあれは不意打ちだ。まともに戦えばどうなつていたかはわからない。勇者に勝てるとすれば勇者ぐらいのものだろうと思った。

「いや……大魔王ファンクラブ内では勇者と持ち上がりられたことはあるが、遊撃隊員ではない」

「遊撃隊の隊長が勇者なんだよな？ 勇者ってのはじりじりやってなるんだ？」

「勇者選定戦がある。国内で最強の実力者が勇者だ。戦つて決めるのが当然だろ？」「

「あんたは出なかつたのか？」

「出たが……決勝は辞退した」

「なぜ？」

アルは聞かなくてもいい気がした。きっとくだらない理由だ。

「活動写真だ。最近開発されたのだが、写真が動くのだ！ 素晴らしいだろ？ その試写会があつたのでな。少女たちがみずみずしいその体をさらけだし排泄する様をなんども繰り返し見ることが出来るのだ！」

「イル」

「はー」

「やつていい

イルは即座に行動をおこした。席を飛び立つと、『ディートヘルムの懷に入り、脇腹目掛けて拳を振りぬく。ディートヘルムは肘を拳に打ちおろしてそれを防いだ。

それ以上の攻撃が無理と悟るとイルは飛び下がり距離をおき、睨みつける。

「ほう、なかなかいい一撃だ！ 見所がある… しかも、髪型は変だがよく見ると可愛いではないか！ 少女よー 君も大魔王ファンクラブの花となる資格があるな！」

「にいさん… 死靈の王の発動を要請します！」

素の状態でもイルの一撃は強力だ。身にしみてわかっている。ここまであつたり防ぐというのがアルには信じがたい。

「イル、下がってくれ」

全力を出して負けることはないだろうが、そこまでする意味もない。イルは凄い形相だったが、しぶしぶ従い席に戻った。

ディートヘルムはいきなり殴りかかられたというのにまったく気にしている様子がなかつた。子供の戯れとも思つたのだろう。強者の余裕が感じられた。

「で、リーリアに手を出しそうなのは大体倒したんだろう？ 問題なくないか？」

「だから最初に言つたではないか。旅に出られては我らの護りも及ばない。忠告したいのだと」

「ああわかつたよ。注意するよ」

「事はそう単純ではない」

「え？」

「問題はリーリア君自身にもある」

再びリーリアに注目が集まる。

「まず……その胸だ！」

ディートヘルムがリーリアの豊かな胸を指す。

「ひつー！」

リーリアが小さな悲鳴をあげて両腕で抱くように胸を隠した。

「それと、そのぽやんとした雰囲気だ！ それが、強く迫れば断りきれずになんとかなるんじゃないかと思わせる…」

「そ、そんなことないです！」

リーリアが必死に反論する。

「どうかね、ではアル君。ここにリーリア君に迫つてみたまえ！」

「なんでだよー！」

え？ とリーリアがアルを見た。少し残念そうだった。

「まあそれらの対策としてはもつと大胆な格好をすればいいと私は思っている。下手に隠そうとするからダメなのだ！ なんだその格好は！ ぶかっとした格好で体のラインが出ないようだと思つていいのだろうが、そんなもの逆効果だ！ 男をなめるな！ 堂々としついれば逆に手を出しにくい、それが男の心理というものだ！」

「アル君……助けて……この人嫌……」

「分かるよ。僕も嫌だ」

アルはリーリアに優しく微笑んだ。

「それと……匂いだ！」

「匂いつてどういうことだよ、別に臭かつたりはしないぞ」

「匂いと言つても、普通の人間では意識的に分かるものではない。無意識化でそれが男を惑わせ惹きつける！」

「……あなたにはわかるのか？」

「うむ、専門的にはフェロモンと言うのだが、尿に含まれるのだ。私の得意分野だ！ 尿、経血、排便、この程度の距離ならその残り香を感知し分析することが可能だ！ それによればリーリア君はそのフェロモン^{ロード・オブ・スペクター}が特別強力だ！」

「死靈の王」

神速といつていいだろ。瞬時に間合いを詰めた二人はディートヘルムを殴り飛ばした。リーリアが顎を、イルが脇腹をそれぞれ殴りつける。上下同時の攻撃には対応しきれず、さすがのディートヘルムもこれには崩れ落ちた。

イルがそのまま頭を踏み潰そうとしていたが、それはアルが制止した。潰してもいいような気もしたが、宿屋に迷惑だろうと思いつどまつた。

「帰ろ」

40万リルを手にアルたちはその場を後にした。大魔王の情報を伝えた時点での商談は成立していると考えてのことだ。

なんだか騒々しいと様子を見に来たデリクはディートヘルムが仰向けに倒れているの見た。それはどこかうれしそうな顔に見えた。

リーリアに忠告を（後書き）

書くの忘れてた内容を無理やりつっこみましたw

- ・第三遊撃隊勇者、ヴァルターのその後
- ・魔族領焼失のその後
- ・リーリアがなぜあんなに襲われそうになるのか。

王女誘拐（前書き）

これも2章後ぐらいだと思します。

「ねえお姉ちゃんは大魔王なんでしょう？ 大魔王ってなにしてるの？」

それはライサのそんな一言から始まつた。

いつもの様にアレがヤバイ亭の窓際の席だ。大魔王とライサが座つてゐる。

まだ幼い少女が一人で酒場までやつてきてるのは何かと物騒かもしぬれないが、それについてはあまり心配する必要がなかつた。ライサにも大魔王ファンクラブがつきまとつてゐるのだ。大魔王ファンクラブ自体が危険だとも思われるが彼らは決して花には手を出さない。ただ見つてゐるだけだ。

「さあ、ライサさんはどう思うんですか？」

大魔王は質問に質問で返した。特にこれといった答えを持ちあわせていなかつたのかも知れない。

「えとね、街に火をつけたりね、お城を壊したり、人間を食べたりしちゃうつてこの絵本に書いてあるの。お姉ちゃんはそんなことしないよね？」

ライサは手に持つていた絵本を大魔王に見せた。表紙には黒い城を背景に、姫を背にかばつた騎士とそれと向かい合つ、真つ黒な影のような男。タイトルは「勇者王の剣」と書いてある。

不安そうな顔で見上げるライサの頭を大魔王は優しくなでた。

「ええ、別にそんなことをしても楽しくないですしね。人間もおい

しないでしようし」

「そう！ よかつたあー」

ライサは笑顔を見せた。大好きな大魔王がそんなひどい事をしないと知つてとても安心した。

「その絵本はどんなお話なんですか？」

「えとね、魔王つていうのはね、とても悪いやつでね。お姫様をさらつて、街に火をつけたり、お城を壊したりしちゃうの。でね、勇者様が魔王のおしろにお姫様を助けに行くの」

「そうですか。魔王というのはそういうことをする方ですか。確かにそんなイメージがありますね」

「でね、お姫様を助けた勇者様は王様になつてお姫様と結婚するの」

そこにデリクがやつてきた。トレイからミルクを2つ取りテーブルに置く。

「お、勇者王じゃねーか。昔よくおふくろに読んでもらつたなあ」

デリクがライサの絵本を見て感慨深げにいつ。まだ小さかつたころ寝る前に読んでもらつていたことを思い出していた。

恐ろしげな魔王に勇敢に立ち向かう勇者。ありふれた題材だったがデリクは好きだった。

「そういやさ、大魔王。お前大魔王つて言つてるけどさ、大魔王らしいことって何かしてるとか？ いつもここでただ飯食つてるだけじゃねーの？」

デリクが鼻で笑うように言つ。いつまで経つても金を払わない大魔王に一矢報いたつもりだつた。

「む。 それは聞き捨てなりませんね。 わかりました。 私も大魔王を召乗るものです。 たまにはそれらしいことをしてみせましょー!」

大魔王は妙な意気込みとともに立り上がった。

マテウ国第十三王女、オフィーリアはとまどつた。 自分のおかれている状況がまるでわからない。 見当識障害、といつ言葉がまず思い浮かんだ。 最近ならつた言葉だ。

彼女は城の庭園でいつものようにお茶を楽しんでいた。 陽気な昼下がり。 王女といつても十三番目。 特に王族としての仕事などない。 ただのんびりと王族らしい振る舞いをしていればいいという気楽な立場だ。

常春の陽気につとつとし、はしたないことにテーブルに突つ伏して寝てしまつたがそれもいつものことだ。 彼女付の侍女が外套を羽織らせ起きるまで側で見守つてくれる。 それが恒例だつた。 だが、彼女は気がつくとじわじわとしたシーツの敷かれたベッドの上で横になつていた。 見えるのは薄汚い天井だ。

ゆつくりと身体を起こしあたりを見回す。 ベッドと簡単な机がおいてあるぐらいいの小さな部屋だ。 掃除は行き届いているようだが小汚いといつ印象はぬぐえない。

ベッドの側では小さな女の子が目をキラキラとさせて王女を見ていた。

その隣には黒衣の美しい少女。 王女もひそかには見覚えがあつた。 大魔王だ。

「わあ！ す「」ー！ お姫様だあ！ す「」ー綺麗なふくだよ！ まつしろだよ！」

王女は純白の清楚なドレスを着ている。またに絵本にでてくるようなお姫様の姿だ。

「むー、ライサさんは白いのが好きですか。黒いのは駄目でしょうか」

「ええー、ちがうよ。お姫様だからだよ。お姫様はしきいのがいいけど、お姫ちゃんは黒いのがいいよー。」

「そうですか」

大魔王は満更でもなさそうにうなづいている。

「お、お前は！ お前はなんてことしてやがるー。」

王女は声がした方を向いた。扉にもたれかかるようにして少年が叫んでいた。今にも倒れそうだ。

デリクにも見覚えのある少女だった。国民なら誰もが知っている二十人いる王女の中でもその可憐さで特に人気のある第十三王女、オフィーリア。こんな薄汚れた宿屋の一室にいていいような人物ではない。

「ふふつ、どうです！ お姫様をわざつきましたよー。」

「なんでー。」

「大魔王らしくないと言つたじやないですか」

「だからってなんでお姫様誘拐してんだよー！」

「わかりやすいでしょう？ お姫様を誘拐するなんてとても大魔王らしいです」

胸を張つて言う大魔王はどこか誇らしげだった。

「……返して…… 今すぐ！ そして謝つて…… 今頃大騒ぎだ！」

「すいません、少しよろしいでしょうか？」

王女が口を開いた。

「私はさらわれたのでしょうか？」

のんびりとした口調だった。こんな状況に似合わないとしても落ち着いた声だ。

「そうですね」

「……そつはならないのではないでしょうか？」

「どういふことですか？」

「大魔王様はこの国の最高権力者です。大魔王様がお召しになられることに否やをとなえるものはおりません。誘拐といふことにはならないとおもうのですが？」

大魔王が目を大きくひらく。

「それは……気が付きませんでした。なるほど、ではこのミッションを成立させるには、他国の王女を誘拐せねばならないといふことですね」

「頼むからそれだけはやめてくれ！ ほんと…」

デリクが悲鳴のように叫ぶ。声が上ずつて裏返りかけていた。

「私からも重ねてお願ひ申し上げます。私でよければ大魔王様にお

仕えいたしますので他国の王女を誘拐するといつのは考えなおしていただけないでしょうか?」

「……わかりました。そうですね。他国まで行くといつのは時間もかかりますし」

しばらく迷つたようだが考えなおしたようだ。そんな大魔王を見ていたデリクは冷や汗が止まらなかつた。

「あの……私をさう際に、侍女のアリカなどは大丈夫だつたでしょうか? 怪我などをしていないでしょうか?」

「みなさんとも素直な方たちでした。王女をさういに来たと言つたら庭園に通していただけましたのであなたを連れてきたのです。そのアリカさんという方も協力してくれました」

王の嚴命により大魔王には絶対逆らひなと王城関係者には徹底されている。それゆえ王女拉致などといつ所業がなんの障害もなく実現できた。

大魔王は王城までゆつくりと歩いて行き、王女を肩に担いで同じようにゆつくり帰つてきた。その道中には撃者は多数いたが特に騒ぎにはなつていな。街の人間も大魔王の奇行にいまさら驚かなくなつてきている。

「ありがとうございます。私はマテウ国第十三王女、オフィーリアと申します」

マテウ国には10人の王妃がいる。側室はない。全員が同じ立場だが、婚姻順に第一王妃から第十王妃と呼ばれている。オフィーリアは第九王妃の長女だ。

「さて……魔王といつのは王女をわらつてだつするのでしょうか?」

「ああ？ 私も誘拐されたのはこれが初めてですのでは？」

「一人が小首をかしげる。さらつた者とさらわれた者がさらわれた後どうすればいいかを考えている。間抜けな光景だった。」

「ノープランかよ！ 先のこと考えて行動しろやこらー。」

「むー、どうせ王女をさらつたとしてもいやらしこじしか考えないくせにえらうなことわないでください」

「ばばばばば、馬鹿いってんじゃねーよー、そそそそんなわけあるかーー。」

「デリクが目に見えて狼狽する。誘拐と言ひ言葉にやはせかとなく淫靡なものを感じていたのは事実だった。」

「魔王が男なら王女をさらう理由はそつなかもしれません。しかしそつとしてもわざわざ王女とこいつに理由があるのでしょうか？ 別に王女でなくても魔王などと名乗れるだけの実力があるならそこから見田麗しい娘をさらえばいいと思つのですが？」

「外交的な理由といつのはどうでしょ？ 王女を人質に有利な交渉を行おうとこいつのは？」

「それはそれで魔王としてせせしましい理由に感じますね」

「こべら考えたところで答へなど出るわけがなかつた。」

「ライサさんはどう思われますか？ 絵本ではなぜお姫様はさらわれるのですか？」

「えとねー、まじゅうおーつていう大きな怪物を起こすんだって。」

「それにお姫様が歌うの」

「魔獣王？ その封印が王女にのみ解ける……といつことなんですようか？」

「ああ、そうだよ。その絵本だとそうだ。結局魔王は復活せずに、魔王は勇者にやられるんだけどな」

立ち直つた『テリク』が言つ。

「そうですか。理由はあつたんですね。でもだとしたら私はどうしたらいいんでしょう?」

「知るかよ!」

「いやらしいこと……をすればいいんですかね?」

大魔王が怪しげに目つきでオフィーリアを見る。年は大魔王と同じぐらいか。肉付きもなかなかいい。触りがいはありそうだった。『テリク』がその光景を想像したのか生睡を飲み込む。

「ふふつ、『冗談』ですよ。ライサさんの前でそんなことするわけないじゃないですか」

ライサいなけりやするのかよ!

「はい! お姫様とお茶会がしたいです!」

ライサが元気よく手を上げた。採用された。

お茶会といつても場を階下の酒場に変えただけだった。いつもの窓際の席だ。

そこに大魔王、オフィーリア、ライサが座っている。テーブルに

は紅茶がおかれていた。

いつもと違う変わらない状況だったがライサはお姫様が目の前にいるだけで嬉しそうだった。

「ところで、大魔王だけど何もしてないと言われたのですが、王女といつのは何をしているものなのでしょうか？」

「はい、私も何もしておりません」

「そうなのでですか？」

「お兄様、お姉さま方は政務に携わっておられたりもするのですが、私のようなものだと特に何もないのでです。宫廷作法の勉強などが王族らしいと言えばそののでしょうけど。いずれどこの貴族か他国に嫁ぐのが役目かとも思います」

「なるほど……では私が特になにもしていなくともいいんではないでしょうか？」

「お前はまず金を払え」

デリクがぼやきながら新しい紅茶をテーブルにいた。王女が何もしていないと大魔王が何もしないことに関連などない。

「その……大魔王様はどうしてこの国にいらしたのですか？ 目的などがあるのでしたら、何もしていないとこのことにはならないと思うのですが」

「そうですね。待つていてるのです」

「何をですか？」

「いろいろですね。例えばお父さん。最初は昔住んでいた家で待つてみたのですが来る様子がありませんでした」

「お父さんはどちらに？」

「わかりません。私に気づくかと思つていたんですが……。まあ、大魔王と名乗つていればいずれ気づいてやってくるかもしません。お父さんは眞の勇者ですからね。きっと来てくれますよ」

「そうですか……会えるといいですね」

「はい。そういえば私が王女を誘拐したんですから、勇者が助けに来るというのではないんでしょうか？」

「さあ、勇者様ですか？ フォグ様は先だつての嵐で噴水がまた壊れたとかで修繕をされているようですし……ヴァルター様は瀕死の重傷と聞いています。動けるとしたら第一遊撃隊のゴドワイン様でしょうか？」

うわさをすれば影というわけか、その時酒場のドアが開かれた。大柄な男が入ってくる。服の上からでも鍛え上げた筋肉が盛り上がりしているのがわかつた。明らかに戦いに身をおくものだとわかる雰囲気を発している。

その男はあたりを見回すと王女のもとへとやつてきた。

勇者ゴドワイン。聖盾の勇者と呼ばれる男だ。

ゴドワインは大きな体を小さく屈めひざまずいたが、酒場のテーブルの間でとても窮屈そうに見える。

魔王の元にいる王女を迎えに行く。特に危険はないと思われたが、念の為勇者が派遣されてきた。

「お迎えに上がりました。殿下」

「おお、おつきこですね！ お父さんと似た感じですよ！」

大魔王はひざまずいていてもその迫力を減じないゴドワインを見下ろして言う。懐かしいものを見たような、どこか嬉しそうな顔だ。

「お迎えも來たことですし、今日はこれでお開きにしましょうか」「はい、こぎなりでとまどいましたが楽しかったです。誘拐はやめていただきたいですが、お呼びくださればまたおうかがいいたします」

王女は「ゴドウインと共に馬車で去つていった。

ライサと大魔王は表に出て手を振つてそれを見送る。

デリクはその光景を見て心底安堵した。自分の不用意な一言からまきおこつたこの事件。それがなんとか無事に終わった。そう思つた。

「むーひお、むぐう」

派手な赤いドレスを来た女がベッドの上で身をよじつていた。猿轡くつわをされ、手足も適当に縄でくくられ身動きが取れない状態だ。女は勝気な瞳でその場にいる者、大魔王を睨みつけている。

「……えーと、何？ これ？」

デリクは膝から力が抜けそうになつてゐる。すごい間抜けな顔をしていた。

いつものように大魔王が占拠した二階の一室がどたばたとやかましい。一言文句を言つてやるうとやつてきらこの状況だ。

第一王女、クリスティア。苛烈な性格から猛女として広く知られている。もちろん国民なら誰もが見知つてゐる。

オフィーリアほど簡単には連れこられなかつたのだろう。強引な手法が見て取れた。

「第一王女様ですよ」

「なんで？」

「デリクさん、十三王女を連れてきた時すごい顔してたじやないで

すか。第一王女を連れてきたらどんな顔をするのかと思いまして」

大魔王が満足そうに微笑んだ。『デリクは大魔王が期待した通りの
変な顔をしていた。

王女誘拐（後書き）

あ、第一王女はこの後丁重にもてなされ、またまたゴドウイーンさんが迎えに来た……とかだと思いますよ。w

しかし、二十人いるとか十三王女とか多すぎですね……。

路上にて（前書き）

今回は web 拍手の方は追加していません。
web 拍手に新作追加するのも、何か拍手催促してのような気もして
きたので……。今後は拍手の更新と、いちからへの追加のタイミング
はばらばらになるかも。

夜のベイヤーの街を三台の馬車が連ねて走っていた。とても豪奢な作りの馬車だ。外からは内部の様子をうかがうことはまったくできない。小窓のようなものもあつたがそこには天鷲絨^{ヘローネ}で出来たカーテンが下がられている。

周囲は二十人からの護衛が馬車を守るようにして馬を進めていた。この厳重な警備の様子からも中の人物が貴人であることが予想できる。

月の明かりもあり、街中には街灯もあるが周囲はやはり薄暗く、馬車に取り付けられたランタンの明かりで周囲を照らしつつもその行進はゆるやかなものだった。

目的地はベイヤーの中でも貴族の屋敷が多くたちならぶ貴族街だ。ここまでくればもう少し。焦る必要もない。

「もうすぐですわね。お父様にお会いするのも久しぶりだわ」

馬車の中、水色の華麗なドレスを着た少女が隣に座る侍女に声をかけた。

「ブルーノ様も大層お喜びになるでしょう」

一等貴族ブルーノの一人娘、グリゼルダ。彼女は大学の長期休暇を利用し所領にある屋敷へと帰る途中だった。本来ならまつすぐに実家へと戻ればよかつたのだが、父親のブルーノが王との謁見のため首都ベイヤーの別宅に来ている。そのためまずベイヤーで会つことになった。

グリゼルダは久しぶりに会う父親へのみやげ話についてあれこれと考えていたが、そのうち妙な事に気づいた。馬車がいつの間にか

その振動を止めていた。街中に入つてからは舗装がより整備されているためか馬車の揺れは少なくなつていたが、今は完全に止まつてゐる。

「どうしたのかしら？」

「様子を見てまいります」

侍女が席を立つと馬車を出た。この馬車は三台のうち真ん中だ。

先頭の車輦の御者へと様子を聞きに行つた。

しばらくして侍女が帰つてきた。困り顔だ。

「お嬢様……道に女性が倒れていたそうです」

「そう。それは難儀なことね」

グリゼルダは別に大したことはないと思つた。ベイマーは治安はいいほうだが、犯罪行為がまったく起こらないというわけではない。物盗りか何かの犠牲者なのだろうと考えた。それならばその女性を隅にでもよせねばすぐにでも動き出せる。だがいつまで経つても馬車は動き出さなかつた。

「おかしいわね。もう一度見てきてくれないかしら？」

不審に思つたグリゼルダはもう一度侍女を使ひに出した。

侍女は再度様子を見に外に出た。またしばらくして帰つてくる。

「お嬢様……その……動いてくれないそうです」

「どういうことかしら？ 死んでいるというわけではなかつたの？」

「はい。特に怪我をしていて動けないということではないようですが……」

「はつきりしないわね。どうして動かないのかしら？」

「それが……ここからは動けないの一點張りとこいつとして、御者の方もほとほと困つておられて……」
「斬つておしまいなさい」

一等貴族の娘という立場でそれは可能だつた。平民を無礼討ちにする。貴族の間でなら多少眉をひそめられる程度ですむだろ。彼女自身は領地を持っているわけでもないので正確には二等貴族だが、一等貴族の娘ということで準一等貴族という扱いになる。ブルーノの権勢があれば、行進を邪魔した平民を殺したところでもほど問題とはならない。

「お嬢様……それは……」
「なに？ わたくしに逆らおうとこいつの？」
「いえ……伝えてまいります」

侍女がまた外に出る。

馬車は防音にも力がいれられていて、あまり外の音は聞こえないのだが、それでも慌ただしい様子はうかがえた。

まったく……わたくしをブルーノの娘と知つての狼藉かしら。だとしたら許せませんわね。

外の騒ぎがおさまった頃、侍女が帰つてきた。結構な時間が経つていて。

「……お嬢様……」

「どうしたのかしら？ その女が死ぬ所でも見てしまつたの？ あ

ぱつりとつぶやいた侍女の顔は青ざめている。

「どうしたのかしら？ その女が死ぬ所でも見てしまつたの？ あ

あ、別にそんな様子は報告してくれなくてもいいわよ

「全滅しました」

「は？」

「護衛の者が全て倒れました」

「……どうこいつのことですの？」

何を言われているのかわからなかつた。相手は倒れていた女が一人のはずだ。二十人からの武装した兵士でかかつて負けるはずもない。

「……」

「何を言つていますの？」

「すいません……うまく説明できません……」

「もういいですわ！ わたくしがこの田でみてきます！」

グリゼルダは要領をえない侍女の言葉にいらだち馬車を飛び出した。

あたりを見回す。貴族街へと続く街路だ。馬車なら一台通るのはすこし厳しいぐらいの広さだが今は通行するものは何も無い。護衛の兵士たちは街路の端の方に積み重なつていた。気絶しているようだつた。

兵士たちの乗つていた馬は所在なきに馬車の周囲でたたずんでいる。

先頭車輦のさうに先。道のど真ん中に女がひとり寝そべつている。確かにこれでは馬車が通れない。

侍女がランタンを持ち慌てついてきた。その明かりで女を照らして見る。

黒衣の女だ。黒く長い髪を後ろで適当にくくつっている。貴族や王族の着飾つた女達を見慣れているグリゼルダから見てもとても美し

いと思える少女だった。

その少女が道で横になり、両手をまっすぐ上に伸ばしている。何が面白いのか『ぐいぐい』と回転したりしてこむ。

「ちよっとそこのあなた！ いつたいここで何をしていらっしゃるの？ どうていただけないかしら？ 通れないでしょ？」

「寝ているんですよ」

「は？」

少女の返答が信じられなかつた。少女は意味が伝わらなかつたと考えたのかさりげに言葉を重ねた。

「眠くなつてきたのでここに寝ることにしたのです

「意味がわかりませんわ！」

「そう言われても寝不足は体にわるいらしいですよ？

「そんな所で寝るほうが体をわるくしますわー。」

「別にどこで寝てもいいじゃないですか

少女が拗ねた。子供のようだつた。

「よくないですわ！ どうていただけないかしらー。」

「いやです

「なぜー。」

「ここで寝ると決めたからです

話がまるで通じていない。御者ともひみつの押し問答を繰り返したのだろう。

「あなた、わたくしが誰だか知つていてそのような口を聞いてらっしゃるのかしら？ わたくしはドナート領主、一等貴族ブルーの

一人娘グリゼルダですわ！ そもそもあなたごときが目通りかなうような相手ではなくつてよ！」

「私は、魔界十七国を支配下におき、このマテウ国 のレガリアを所有する大魔王です。その全ての権力を駆使してここで寝るといつているのです！」

少女は寝そべつたまま大見得をきつた。嫌な権力の使い方だつた。

「はい？」

聞きなれない言葉がでてきた。大魔王。いや、聞いたこと自体はあつた。なんでもこの国は大魔王に支配されているらしいと学友から聞いたことがある。だが何かの冗談だと思い本気にはしていない。事実この国の大半の者が大魔王に支配されているなどと信じてはいなかつた。

「お嬢様……確かに大魔王がレガリアを所有し最高権力者になつたと高札に掲示がありました」

「……これが？ この方が大魔王？ 最高権力者？ 馬鹿なことを言わないでくださいなーい！？」

苛立ちが侍女にぶつけられた。侍女は平身低頭してかしこまる。グリゼルダは少女をにらみつける。大魔王だかなんだかは知らないが、護衛の兵士がやられたのは事実なのだろう。グリゼルダも貴族だ。力は平民以上にある。だが、兵士たちもまた貴族でそれがかなわなかつたというならグリゼルダはどうしようもない。ほんの少しおもねることにした。

「ねえ、あなた。少し端によつていただけないかしら？ それで馬車は通れるとと思うのだけど？」

「そうですね。確かにそれで馬車は通れるでしょう。でもそれはいやです」

「なぜ？」

「先程も言つたよつてここで寝ると決めたからです。そうですね、ではいいことを教えてあげましょう。ここを少し行った所から脇道に出れば私の後ろ側の道につながっていますよ。先へ行きたいだけならそうすればいいと思います」

少女は横になつたまま、グリゼルダの後方を指さした。

道をそれる。少女の提案は悪くなかった。彼女たちはただ自分の別宅に帰りたいだけだ。少し遠回りになるがそれほど時間もかからない。だが、グリゼルダは意固地になつた。ここで回り道をすると、いつのは負けを認めるということだ。

「わたくしもいやですわ！　わたくしはここを通りたいのです！」「お嬢様……回り道をしてもよろしいのでは……」「あなたは黙つていて！」「申し訳ありません」

グリゼルダは大魔王を名乗る少女をさらり、にらみつけた。少女は何か楽しそうにグリゼルダを見つめ返す。下から見上げているといつのに妙に偉そうに見えた。

「わかりました。ではあなたは何か芸をお見せ下さい。それで考えましょ？」

「芸？」

「なんでもいいですよ。一発芸というんですか？　私を楽しませてください」

「なぜわたくしがそのようなこと？」

「今この道を支配しているのは私です。あなたがここを通れるかど

うかは私次第ですよ？」

グリゼルダは言葉に詰まった。腸が煮えくり返りそうだ。この無礼な女をどうにかしてやりたい。だが打つ手がない。

「くつ……あなた！ 何か芸はお持ちでありませんの！」

グリゼルダは侍女に聞いた。

「あ、それは駄目です。私はあなたの芸が見たいです」「……わかりましたわ！」

芸などと言われても特筆すべきものはもつていなかつた。グリゼルダは考えたあげく、昔父親に大いに受けたあることを思い出した。にらめっこだ。

グリゼルダはしゃがみこむと大魔王に顔を寄せる。そして人差し指で鼻頭を上にあげて豚鼻を作り、寄り目をしてみた。

どうかしらー 私の渾身の一芸ー

それはそう大したものではなかつたが少女には受けたらしい。笑つていた。吹き出しそうになるのを抑えているように見えた。

「面白いですね！ そういうことをされないような方に見えたので意外性がありました」

「では通してくださいますわねー！」

「え？」

少女は不思議なことを聞いたといわんばかりの顔をした。

「え？」

グリゼルダも思わず復唱してしまった。受けたはずだ。これで文句はないはず。

「私は考えると言つたのです。通すとは言つていませんよ？」

「卑怯ですわ！」

「それは……言質をとらなかつたあなたが悪いですよ

少女があたりまえのように言つた。グリゼルダは恥を覚悟の上で、の変顔が無意味だったのかと思つと頭に血が上り倒れそうになつた。

「まあさすがにこれは人が悪かつたですね。では私のなぞなぞにお答え下さい。正解ならここを通してあげます

「つそじやありませんわね？」

「ええ。なぞなぞと言つても、ライサさんといつ小さな女の子から聞いたものです。そう難しくはないと思します」

「わかりましたわ！ どうぞ！ そのなぞなぞをやひをやつしあつしゃつしてくださいな！」

「では。朝は天使、昼は淑女、夜は娼婦。これなーんだ？」

「……ちょっとお待ちください……それは本当に小さな女の子が言ったんですの？」

「ああ、間違えました。朝は四本足、昼は一本足、夜は三本足、これなーんだ？」 でした

「全然違つじやありませんのー！」

「まあまあ、まあ答えをどうぞー！」

「のなぞなぞならグリゼルダも聞いたことがあつた。

「簡単ですか！ 答えは人間ですー！」

朝昼夜は人間の一生を表している。朝は幼児期、赤ん坊の四つん這いで四本、昼は青年期で一本足で立ち、夜は老年期、杖をついため三本足。グリゼルダが聞いた覚えがあるなぞなぞはこのような答えだつた。

「はずれです

「なぜ！」

「答えは私がそばにいる時の、テデスコさんです。彼は通常四本足ですが、私が朝からそばにいるとストレスから自食行動に走り足を一本食べてしまうのです。ですので朝は四本、昼は一本です。夜には再生が始まつて三本に戻り、翌朝には四本に戻ります」

「そんなのわかりませんわ！ しかもそんな答えを小さな女の子が考へているとはとても思えません！」

「私がアレンジしてみました」

「勝手にアレンジしないでください！？」

大声を出しそぎてグリゼルダは疲れ果てた。声も枯れてきた。

「とにかくそんな、なぞなぞは無効ですわ！」

「そうですか？ 人間という答えもかなりいい加減な感じがするのですが……」

少女は納得がいかないらしい。横になつたまま腕を組み首をかしげている。

「大魔王じゃねーか？ そんなところで寝転がつてなにしてんだ？」

どちらも譲らない硬直状態がしばらく続いた後に、少女に声がかけられた。その場にいたものの注目がその声の主に集まる。

「」んばんは。 フォグさん

「フォグ様！ 」の様な所でお会いするなんて……」

グリゼルダは少女との問答の徒労も忘れ目を輝かせた。第一遊撃隊の勇者フォグ。この国の少女たちにとつて憧れの対象だがグリゼルダもその例にもれなかつた。

フォグは貴族街の方からやつてきていた。グリゼルダがこれから向かおうとしている側だ。

「」の方と遊んでいたのです
「遊んでなどいませんわ！ …… いえ、その遊ぶといつか少しのお話を……」

グリゼルダは声を荒らげたあとにあわてて取りつぶつた。

「フォグさんはこんな夜更けにどうひらる？」

「ああ、飲みにいくだけだよ。アイゼンとかとな。大魔王、お前も来るか？」

「はい、」こつしょしょしょい

そうこつと少女は立ち上がり、あつさりとフォグの後ろについて歩き出した。今までの押し問答などまるでなかつたかのようだつた。

「ちよ、ちよとお待ちください！ あなた」」を通さないとわんざわんねでおられたじやありませんの……」

「あなたと遊んでゐつぱりすつかり田が覚めてしましました

「え？」

「ですの」」で寝る必要はもつあつません。」血田でお通つぐだれこ

「……わたくしも行きますわ！ フォグ様よろしくて？」

そう言われてフォグは戸惑った。話しかけられるまでグリゼルダだとは思つてもみなかつた。グリゼルダとは多少の面識はあつたがこのような路上で大魔王と喧嘩しているなどとわかるはずもない。

「え？ グリゼルダ嬢？ いや、いいけど、そんな貴族のお嬢様が行くような店じやないぞ？」

「かまいませんわ！ 大魔王が行くというのですからいいでしきう！」

そういうと、グリゼルダもフォグの後につく。

「お嬢様……」

後に残された侍女と御者たちは途方にくれてしまつた。

「遅いな……」

久しぶりの娘との食事を楽しみにしていたブルーノは豪勢な食事を前に待ちくたびれていた。

まさか大魔王と押し問答したあげく、下町の酒場に向かっているとは夢にも思つていなかつた。

路上にて（後書き）

昔住んでたところの近くで、道の真中で寝てしまつて邪魔な犬がいたなあ、と思いだしたのが元ネタです。w

リクスケさん（前書き）

Web拍手に載せてないやつです。

Web拍手の方にもひとつ追加しました。

今日もまたあいつがやつてくる。

どこに逃げても無駄なのはわかっているが、あがかないわけにもいかない。

あの小さな体のじいにそんな力があるのかはわからないが、あれは常軌を逸してこる。あれは暴虐の塊だ。
魔界広しと云えどもあそこまで急激に成長しているものはそうはない。

どこに逃げようか。そんなことばかり考えている。

なんで俺があんなのことばかり考えなくてはならないのか。ストレスでおかしくなつてしまいそうだ。思わず足の一本にかぶりつく。多少落ち着いたがこんなことを繰り返していくとまた足が減つてしまつ。

散々うろついたあげく巨岩が立ち並ぶハゲ山へとやつてきた。ここまでくれば大丈夫とは言えないが、とにかく距離は稼いだはずだ。岩と岩の隙間へと体を押し込む。軟体ゆえに出来る技だ。完全に体を岩の隙間の闇へと押し込むとようやく落ち着いてきた。

これはいい。闇と狭所が包みこむように安堵感が込み上げてくる。ここなら大丈夫だ。

「テテス「わん」

全然大丈夫じゃなかつた。悪魔の呼び声がする。いや、俺も悪魔だがそういう意味ではない。比喩表現としてのアレだ。

畜生！ なんでこんなとこまでくるんだよ。おとなしく森で暴れてもよ。いや、おとなしく暴れるつてなんだよ？

俺が自問自答していると、俺を包み込む岩の隙間がゆつくつと広がつていぐ。

今日もだめだつたか……諦めと共に見上げる。

そこには巨石を軽々と持ち上げているガキがいやがる。あいつだ。パエリア・グンネル・ガンボア。確かそんな名前だつたはずだ。

「テテス」さんは狭い所好きですよね」

少女は持ち上げていた石を放り投げた。それは山の斜面に激突しハゲ山の奇景をさらに奇妙なものへと変える。

黒髪黒目の中年女性。髪は手入れをしていないせいいかぼさつとしたもので肩のあたりまである。この少女がここ最近のストレスの原因だつた。ずっと追い掛け回されている。

「なんで……なんで俺がここにいるってわかった！」

蛸が叫んだ。巨大な蛸としかいいようのない怪物が叫んでいる。ただし蛸としては奇妙な事に足の数が少ない。四本しかなかつた。

「テテス」さん、ぬめぬめしていますからね。粘液の後を追つてくれればいいだけです」

まだ幼く見える少女は自慢気に言った。

「そんなことかよ、ちくしょー」

テテスは少女を憤々しげに見た。こんなガキに何びびつてるんだとは思うが、実力が違ひすぎる。

その少女だがいつもと様子が違つた。なんだらうと考へるとすぐ分かつた。服だ。今まではボロ雑巾のようなものを見にまといほとんど裸同然といった格好だつたが今日はひどく豪華な装いだつた。金色の毛皮を身にまとつてゐる。肩口には狐の頭部がのつかつていた。その顔には見覚えがある。

「お前……その狐は……」

「ん？ お友達ですか？」

「いや、友達つていうかその女狐にはよいじめられてたんだが……そいつ三尾のフイリパじゃねーのか？」

「名前までは存じませんが、確かに三本ありましたね、ほらほら見てください」

そう言つて少女はお尻をテデスコに向けてふりふりと振つた。そこに三本の狐の尻尾がついている。

「勝つたのか？」

「はい」

少女はあつせつと口こした。信じられない。

「お前何歳だつけ？」

「こちらに来たのが十歳ぐらいの時ですね。それから一年近くいると思ひますので十歳から十一歳の間ぐらいかと思います」

「あの狐の一族は百年で一尾増える。フイリパは三百歳近かつたはずだ……」

ふざけるなと言つた。一年やそこりで三百年近い年月の差を埋められてたまるか。

「そろそろ服が欲しいと思っていたのでいい毛皮が手に入りました。でも毛皮だけ手に入れても私には加工技術がありません。とりあえず何かくつつけるものが欲しいと思いまして蜘蛛の方の所へ出向きました」

「蜘蛛……つてリコディアの森の主か？あの蜘蛛女かよ」
「多分そうですね。で、私は蜘蛛が粘着性のある糸を吹き出すと知つていましたのでお腹のあたりをもいでぴゅーぴゅー出して毛皮を適当にくつつければいいと思つたのですが」

「もいだのかよ！」

「いえ、狐さんの体を担いでいつてその糸をお伝えしたら、勘弁してくれと。服なら作つてやると言われまして。で、この素敵な服が出来たのです！ どうです！」

少女がその場でくるつと回転した。良く出来た毛皮のホールトだ。とても似合つていて。ホールトの内側にも新しいシャツとズボンを着ていた。こちらは狐の素材ではないので、蜘蛛の糸を織り込んで作つたものようだつた。

「まあ……三尾の死体を見せつけられたらそつなるだらうな……で、今日は何しに来たんだよ」

「え？ ですからこの服を見せに来たのですが」

「それだけかよ！」

「あ、それと修行は別ですよ」

そう言つと少女は手刀を繰り出した。テデスコの大きな頭部に遠慮無く叩きつけられる。テデスコの丸い頭部が限界まで歪められ岩壁にぶつかつた。

「ペゲーリツ」

変な声が出た。衝撃を無理やり逃がす。背後の岩が爆発するよつに砕けた。

「お……お前いきなり何しやがる!」

「やつぱつテ「デス」さんは頑丈でいいです。今まで会つた中で一番頑丈です」

「頑丈なんじやねーよ……衝撃を逃してるだけだ!」

「いえいえ、それがいいんです。逃し切れない攻撃を身につけるのが今の目標です」

「なあ……それ完成すると俺どつなっちゃうわけ?」

「死ぬんじやないですか?」

可愛く小首をかしげながら言ひ。そんなんでもないよつに言わないでくれとテ「デス」は悲鳴をあげたくなつた。

「嫌だよ……なんでそんな修行とかで殺されなくちゃいけないんだよ!」

「わかりましたよ。きつきつでやめます。まつたく……わがままですね」

「死にたくないってわがままなの!?」

「大丈夫ですよ。冗談です。テ「デス」さんはお友達ですからね、殺したりしません。……多分」

また唐突に攻撃が始まった。手刀が上から下から自由自在に襲いかかつてくる。

「たべつえ」
「のげそ」
「ぼばあ」
「ひげえ」

「…………」。ぎりぎりだ。ぎりぎり衝撃を何とか逃していた。受け流された攻撃はあたりを破壊していく。酷いありさまになっていた。このあたりに主がいるなら黙つてはいないうだらうといつ惨状だ。

「なあ…………本当に俺を殺すつもりはないのか？　本当は俺が憎くて仕方ないとかいうことはないか？」

「え？　ああ、手加減とか忘れてました。でも今のところ大丈夫そうじやないですか？」

「…………俺死ぬよな…………そのうち…………」

ひとしきり暴れて満足したのか少女は攻撃をやめていた。

「…………」。やういえばテデス「さんは何故四本足なのでしょうか？　お腹が空いて食べちゃったのでしょうか？」

「食べねえよ！　いや…………たまに食べる」とはあるが……いや、

そうじやなくて四本は賭けで取られた

「どうこう」とですか？　取られても生えてきやうですが？」

「あー、そういうんじゃんねーんだよな。なんつーのか、足そのものの存在を奪われたというのかな。まあこのままじゃ生えてこねーよ。奪い返さない限りな」

少女はそれを聞いて何か考え込んでいる。もしや、と思う。友達だと言つていたし取り返してくれると淡い期待を抱いた。この少女の強さならあいつこで勝てるだろ？と思つた。

「…………私は端についてても詳しいのです」

何か思つていたのとは違う展開だった。そこは取り返しに行きましょうとかじやないのかと疑問に思つ。

「蛸の足の一本はおちんちんだと聞いたことがあります。それも取られたんですかね？」

少女は興味津々だった。

「……ノーロメントだ……」

「あー！ やつぱりないんですね！」

「ノーロメントだって言つてるだろ？ が！」

少女が追求を重ねようとした時だ、山の上から岩石が降つてきた。斜面に突き刺さったそれはゆっくりと身を起こす。それは巨大な岩石で出来た巨人、この山の主だった。

「貴様ら！ ここで何をしている！」

凄まじい大声だった。怒りに溢れている。自らの縄張りをいいよう荒らされたのだから当然の反応だった。

「つるさこです！ おちんちんの話をしているのに邪魔しないでください！」

少女は振り向きもせずに腕を背後に向けて一閃した。それは敵の位置をろくに確認もせずに放たれたものだったが、あっさりと巨人を上下に両断し、背後の山の斜面に深い傷跡を残した。

テデスコはそれを呆然と見ていた。明らかに自分に対して放つていた攻撃と威力が違つた。あの一撃を受けて無事でいられる自信はない。

この山の主がどの程度の実力なのかは知らなかつたが、この規模の山の主なら相応の実力者のはずだ。それを一撃で倒すのかと思う

とストレスで胃が痛くなってきた。いつそれが自分に向かはれるのかわからない。

「お前……あんなこと出来るの?」なんで俺で修行してんだよ。」

「今のはずるです。魔力を使いました。私の目標は魔力なしで「テレス」さんを死ぬ一歩手前まで追い詰めることです。」

「その目標は嫌すぎる。」

「さて、ではどの足がおちんちんなのかの話に戻しましょう。」

「嫌だよ! 戻りたくねーよ!」

「おちんちんが取られたのなら取り返してあげますよ?」

一瞬心が揺らいだ。そしてそれを少女に見透かされた。

「あ、やつぱつわうなんですね。」

少女が勝ち誇ったような顔をしていた。

「まあ、やつぱつわう」となら取り返してあげますかい?」

「テレス」は体だけでなく、心まで傷めつけられていくような気がしてきました。

「ちよつとー、あなたさつきからなこをおひしゃつてこらのかじらー。」

グリゼルダが木製のジョッキをテーブルに叩きつけながら叫んだ。

酔っ払っている。

「はー。なんだかテテスロさんの実在を疑われている気がしましたので、テテスロさんとの心温まるヒソヒソトークを語つてみたのですが」

対するは大魔王。同じテーブルにつきもぐもぐと肉を平らげている。

フォグ、アイゼンも同席していたが、グリゼルダの剣幕に押されても何も言えない状態だった。

「それにせつときから、おちんち……ト品な言葉を連呼しないでくださいなー!?」

「ああ、正確には生殖器ですね。テテスロさんの触手には排尿の機能はありませんので」

「そんなこと聞いてませんわ!」

荒ぶるグリゼルダをフォグがなだめにかかる。ソレはアレがヤバイ亭の一席だ。馬車で通る通らないの問答の後にソレにやつてきた。

「それ」せつときから聞いていると、そのテテスロさん? とやうの心情までべラべラと! そんなことがわかるものですか!」

「ふふつ、嫌がらせには相手の心情を察するのが重要です、テテスロさんはきっとやう思つていたに違ひないです」

それを聞いてグリゼルダは愕然とした。

「もしかして……やつきのあれもただの嫌がらせですの!?」

「さあどうでしょ? まああなたが出てくるまでは単にあそこで寝ていようというだけだったんですが……」

「やつぱつですのね!」

「そ、うい、え、ば、結、局、テ、デス、コ、さ、ん、の、足、を、取、り、返、し、に、行、つ、て、い、ま、せ、ん、で、し、た。約、束、で、す、か、ら、ね。そ、の、つ、ち、行、つ、て、お、か、な、い、と、」
「ど、う、で、も、い、い、で、す、わ、！」

絡みぐせのあるグリゼルダを飄々と受け流す大魔王。結局こんな酒宴は朝まで続けられた。

グリゼルダの父親、ブルーノは結局いつまで経っても返つてこない娘を一晩中待ち続けた。

翌朝、べろんべろんに酔つ払つて朝帰りをした娘を見て卒倒しそうになつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2380y/>

大魔王のひみつ（大魔王が倒せない番外編）

2011年11月20日03時59分発行